

# 平成21年度作文コンクール

安全振興会では、生徒の皆さんの安全意識の高揚を図るために、「安全」又は「健康」をテーマに作文コンクールを実施しています。今年度も素晴らしい作品が961編も寄せられました。永野隆史選考委員長、畠山利子副委員長、野村武、山口健一、伊藤伸子、岩壁清吉委員の6人の元校長先生に審査をお願いしました。最終選考会議では、最優秀2編、優秀6編、佳作41編が決定されました。この中から最優秀に選考された太田ちひろさん（神奈川総合高校1年）と村松泰聖さん（柏陽高校2年）の作品を掲載しました。

## 最優秀賞

### 傘かしげ

県立神奈川総合高等学校1年

太田 ちひろ

「傘かしげ」とは、江戸時代のマナーのひとつである。傘をさした者同士が道ですれ違うとき、互いの傘を傾けるという動作のことだ。  
——四月、高校生になったばかりの私の前に最初に立ち上がった壁は、電車通学の辛さである。まさか電車通学にこんなにも危険が潜んでいるとは思ってもいなかった。  
まず驚いたのは、ホームへ向かってダッシュしていく人の群れである。初めの頃はよく肩を弾かれ、とても嫌な思いをした。改札口付近は縦横無尽に人が行き来するため、特に危険である。つい最近も、ホームを走っていた中年の男性が、あと少しでおぼろさんと正面衝突をしそうだったところを目撃した。一歩間違えれば大きな事故になっていたかもしれない。次に危険だと感じたのは、電車のドアが開いた直後の、座席を確保したい人たちの押し合いである。押し合いと言っても相撲のようなものではなく、前の人の背中をぐいぐいと押し急がすようなものだ。しかし体格のよい人は本当に力が強い。以前、前から三番目に並んでいても後ろから押されて座れないことがあった。  
それから、駅での道の譲り合いがとても少ないことにも驚いた。すれ違ふ人が皆、初めから道を譲る気なんてないと言っているような顔つきで歩いているように見えてしまう。  
これらの体験から、私は通学の時間帯の駅がとても危険に感じるようになった。行き帰りの電車通学だけで精神的にも肉体的にもエネルギーを消耗し、家に帰ったらまるで死んだように眠った。あの朝夕の駅を想像するだけで胃がキリキリと痛んだ。  
しかし、それは目を重ねることにだんだんと薄れていった。なぜなら、日の移り変わりに合わせて私も変化していったからである。弱気である人とにぶつかられるような気がして、駅に着いたら強気で歩くことを心がけるようになった。電車を並んで待っているときは座ることだけを考えるようになった。四月に比べ早足になり、道を譲る回数も減った。気付いたら私は、四月の頃に恐れていた人たちと同じようになっていたのである。  
そつした折りに、「傘かしげ」という言葉を知った。電車でも席を譲り合ったり、道のすれ違いで体を傾けてくれた人に出会ったとき、心がほっとする自分を思い出した。その言葉から私は、マナーを守ることには「安全」に繋がるんだ、ということを知った。マナーを守ることによって安全が生まれることに気付かされた。マナーという、一人一人の心がけが安全をつくっていくという、大切なことを忘れて生活していたと思う。「傘かしげ」をしていた江戸の町はどのような環境だったのだろう。人々はどんな顔をして町を歩いていたのだろう。私も、「傘かしげ」の心を持って今日から電車に乗ろうと思う。

## 最優秀賞

### 走るごとく小さな世界のこと

県立柏陽高等学校2年

村松 泰聖

「ただ走る。この何がそんなに楽しいの？」そう聞かれることは多いけど、その度に僕は答えあぐねてしまう。だってあんなに過酷で孤独な競技の良さなんて、自分でも良く分からない。スタートラインに一人立たされて、胃がひっくり返りそうになる程の距離を乗り越えても、表彰台に上ることができるのはほんの一握り。こうして五年間走ってきたのが不思議なくらいだ。  
ただ、それでも陸上競技——短距離走の世界で走っていると、疲労や苦痛とは裏腹のおかしな心地良さを感じる時がある。  
体に鞭打ってゴールに突き進んでいるとき、声援に混じって耳に入るのは風を切る音だ。競技場の空気が色を変え、密度を増し、幾重にもなっているように感じる。トラックが日常から切り離されて、まるで深い海の底で漂っているような錯覚を起こす。どこか心が軽くなって、ありのままの自分と向き合うことができる瞬間、陸上競技場は自分だけのフィールドになる。  
僕達の暮らす社会は豊かで、広大で、あらゆる可能性に満ちている。でもそれ故に、ちよつと複雑で、大きすぎて、押し潰されそうになる時がある。高層ビルを見上げていると首が痛くなって、アスファルトの照り返しが体を焼いて、見知らぬの人に足を踏まれて、へとへとになって逃げ出したくなる時がある。  
だから僕は、幅一・二メートルのレーンを走る。現実から目を逸らしているだけかもしれないけど、ほんの数秒間だけ大目に見てほしい。明日のテストも、将来の不安も、先週振られた彼女のことも、あと三時間で人類が減ることも、面倒ながらも振り払って、頭をからっぽにして自分自身と向き合う。こんなことができる場所は、世界中のどんな秘境を探したってあの赤茶けたトラック以外に見当たらない。  
きつとあらゆる人達が、そんな「小さな世界」を持ってはいるはずだ。まるでラインカーを使って白線を引くように、誰もが大きな世界との境界線を作っている。そして、勉強や人付き合いなんかによつと嫌気がさしたとき、大きく息を吐いてその世界に飛び込んでいく。  
もちろん、誰かの世界は卓球台の上に広がっているかもしれない。また別の誰かの世界はピアノと五線譜の上に広がっているかもしれない。僕の場合、たまたまそれがスタートラインから延びてきたことだけだ。世界は一つではなく、至るところにその輪を広げている。自分にとっての「小さな世界」はどこにあるのか、ぜひ考えてみてほしい。その世界を大事にしてほしい。辛い時は思い出してほしい。きつとそこには、心を豊かにするありったけのものが詰まっているはずだ。